

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	林 佳恵
論文題目	古靈寶經の研究—敦煌本「靈寶經目錄」に於ける經典の分類をめぐって—

審査要旨

靈宝經は、上清經と並んで六朝・隋・唐期の道教經典の中で最重要と目された諸經典を擁する經典群であり、その最初期の形成史（すなわちこの標題にいう「古靈宝經」の形成史）を知ることは、道教の伝統形成の基本を知ることと直結する。この論文（以下、「本研究」と称する）で考察の対象となる敦煌本「靈宝經目錄」は、大淵忍爾博士によって敦煌遺書中から発見・解説された靈宝經の經典目錄であり、大淵博士が指摘した通り、五世紀の道士陸修静（406-477）が編んだ靈宝經目を反映するものとして（事実上は、陸修静の靈宝經目そのものの如く）扱われ、六朝期の靈宝經の現存状況を伝えるだけでなく、道教の形成過程を知るための基本資料として重視されてきた。本研究は、この「靈宝經目錄」が、その事実上の作者である陸修静の独自の視点によって構成されていることを示し、それによって当時の道教經典の組織化に対する陸修静の積極的な取り組みを明らかにするものである。

本研究における独自の論点は、以下の四点に集約されよう。

第一は、所謂「元始旧經」の構想の内実が陸修静によって定められたという指摘である。「靈宝經目錄」には、陸修静が靈宝經として認めた經典が所謂「元始旧經」と「仙公新經」とに分類されて載せられている。一般的に「元始旧經」とは、陸修静が「旧目」と呼ぶ既存の經典目錄を参照して作った分類概念と理解される。すなわち、陸修静の時代に現存した五十五卷の靈宝經の中から「旧目」所載の經典と判断されるものを選び分けて「已出」の經典として記す一方、現存の經典に見出せなかったもの（小林正美博士）や、あるいは見出せても真經とは認め難いとして無いことにされてしまったもの（大淵博士）などを「未出」として分類し著録したとされる。それに対して、「旧目」に載せていない靈宝經が「仙公新經」とされる。この基本図式は、著者である林氏も含めて多くの学者に共有される考え方といえる。しかし、大淵博士や小林博士が共に「旧目」著録の經典は、そもそものはじめから、元始天尊を教主とする「十部妙經」と呼ばれる組織を有する靈宝經典として構想されていたと論ずるのに対して、本研究が新見解として提示するのは、「元始旧經」の構成要件とされる、元始天尊を教主とする「十部妙經」という想定は、実は陸修静が靈宝經の中にある諸要素を拡大解釈して創作した、陸の独創であったという見解である。著者によれば、所謂「旧目」には、（三十六卷という想定は本来備わっていたが、）「十部妙經」という想定を含むとは考えられず、また収録經典も元始天尊所説の經典に限定されるとは限らない。「元始旧經」という構想は陸修静の独創であるという本研究の着眼は、靈宝經典成立史における陸修静の地位を更に高めることになり、道教研究における重要な問題提起を含む。

本研究における第二の独自の論点は、陸修静がその著作の中で触れている、靈宝經の出現に関する歴史物語の構成と「靈宝經目錄」の構成とが対応していることの指摘である。陸修静は、靈宝經が地上に降臨する状況を二分法的な歴史に整理する。すなわち、劉宋王朝成立期に瑞祥として下る「元始旧經」の顕現と、それ以前の時代において、その時々、しかるべき人物のもとに「仙公新經」が下ってきたさまとが対置される。このように、陸修静は、時間軸を用いた観点から新旧両經の関連を説いて、靈宝經の全体像を示したことが指摘される。「靈宝經目錄」の構成が陸修静自身の經典觀の表明であることを、説得力をもって伝える議論といえる。

第三に、本研究では、陸修静が創始した「元始旧經」「仙公新經」の二大範疇を設けることで靈宝經典の全体を示すという観点は、後の時代へは明確に継承されていないことが指摘される。これは、陸修静の影響力とその限界についての興味深い議論といえる。

第四に、本研究では、先学によって指摘されてきた「仙公新經」の特徴である、天師道の要素の介在について、靈宝經に摂取された天師道の要素には、元来の天師道では想定されていなかった靈宝經ならではの特色が加えられていることを指摘している。このことにより、靈宝經の制作者は、単純に天師道に還元することので

きない自立的な立場を有することが示される。六朝道教研究の重要な課題に示唆を与える指摘といえよう。

本研究における注目すべき論点は以上の通りである。以下、章ごとの議論を要約して示す。

第一篇第一章では、小林正美博士がその靈宝經研究の中で「靈宝經目錄」の經典分類に対して試みた復元作業が検討され、結果的に、そのような復元を行わなくとも「靈宝經目錄」の分類に破綻は生じず、陸修静の「靈宝經目錄」の分類を原本のまま扱い得ることを述べる。

第一篇第二章では、『五符經序』には仙公から伝授されたという設定がないにもかかわらず、「靈宝經目錄」では「仙公在世の時に得られる書」として「仙公新經」の筆頭に挙げられる。このような整理が施されることについて、著者はそこに陸修静独自の靈宝經史観が介在していることを指摘する。

第二篇第一章では、陸修静の分類概念の要のひとつである新旧概念が、靈宝經そのものの中に見えないことを明らかにし、それが陸修静によって独自に導入された分類概念であることを示す。

第二篇第二章では、靈宝經の中にある「十部妙經」の觀念が陸修静の考える「十部妙經」とは異なっていることが指摘される。陸修静は「元始旧經」を「十部妙經」とみなすが、実際に靈宝經の中に見える「十部妙經」という想定は、陸修静が「元始旧經」とみなす經の一部にしか妥当しないことが示される。こうして、「元始旧經」という範疇は陸修静が靈宝經の中の要素を拡大解釈して他の經にあてはめて作り上げた新たな範疇であった可能性が示唆される。

第二篇第三章では、「元始旧經」と「仙公新經」という範疇分けは、もともと個別に独立して成立していた異なる二つの經典群に対して適用された区分ではなく、相互に共通要素を含むある程度混然とした全体に対して、陸修静が觀察者的な観点から經典を成立させる正統性を読み取りつつ線引きした区部であることを示す。

第三篇第一章では、靈宝經に見える天師道に関連する諸事項が本来の天師道において見られるものと比較すると靈宝經ならではの特徴を有していることが指摘される。この章で著者は、靈宝經の作者が天師道に対して排他的でも従属的でもない態度を取りつつ、独自の立場を有するものであることを明らかにする。

第三篇第二章では、最初に第一篇第二章で扱われた論点が更に深められる。更に、本章後半は、「元始旧經」と「仙公新經」という二分法が陸修静以降の靈宝經観においては影を潜めることが指摘される。最後に、「旧目」についての議論がなされる。「十部妙經」という想定や元始天尊の所説という条件は、「旧目」にそなわると考える必然性のないこと等が論じられる。

以上が章ごとの要旨である。元始天尊を教主とする十部妙經から成る「元始旧經」と、それよりも新しく、なおかつ伝授において仙公を経由する点を特徴とする「仙公新經」とを対置し、それによって靈宝經をひとつの全体として描くという構想が、陸修静に発するものであり、それ以前に遡るものではないという指摘は、靈宝經と初期道教の形成を考える上で大いに示唆に富む。なお、「靈宝經目錄」における「元始旧經」と「仙公新經」を対置させる構図が、陸修静が一部の經典に存在する要素を全体に拡大させるなどして創り上げた、靈宝經を一体的に表すための一種の見せ方の技術のようなものであったとするなら、陸修静が介在する以前の靈宝經の実際の状況をどのようなものとして描き得るかが改めて問われることになるであろう。本研究はこの点については及んでおらず、今後の課題といえそうである。しかし、そのような問題意識を開くという点も含めて、本研究は道教研究において重要な意味をもつであろう。本研究を博士学位の授与にふさわしい論文として認める。

公開審査会開催日	2016 年 2 月 25 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏 名	専門分野	博士学位名称
主任審査委員	早稲田大学・教授	森 由利亚	中国道教思想史	
審査委員	早稲田大学・教授	土田 健次郎	中国近世思想・日本近世思想	博士(文学)
審査委員	早稲田大学・教授	渡邊 義浩	中国古代思想史	文学博士